

第 46 回宇都宮市民芸術祭 洋画・版画部門 審査総評

第 46 回宇都宮市民芸術祭洋画・版画部門の審査が 6 月 18 日（水）に行われた。今年の応募総数は 105 点と昨年度から 8 点の減少となったが、目を惹く作品が多数見受けられた。

市民芸術祭賞は鈴木兼一さんの版画作品である「風に遊ぶ・枯れた芒野」。まさに題名のとおり、枯れすすきに当たる風や光が見事に描写されている。それ以上に、野の広がりや乾いた空気感といった現場でしか味わうことができない感覚が作品をとおして感じられる点も好評を得た。

準市民芸術祭賞は 2 点選出された。1 点目は露木孝さんの「街 27」。この作品の最大の特徴はマチエール（画肌）である。まず白や黒、赤の線が無数に交差されているのが確認される。それらが透明なメディウムの層の中に介在しながら建物の形態を映し出し、深味を与えている。2 点目は唐思意さんの「Meeting」。デフォルメされた人物が印象的な作品である。重苦しい会議の様子を表現しているのだろうか、人物たちのまなざしはシリアスにもコミカルに見える。横長の画面を生かした動きのある構成も良い。

その他の受賞作においても、意欲的な作品が目立った。今後の発展に期待したい。また今回は小品部門への出品が増加し、密度の高い作品が多く見受けられた。

ご高覧いただけると幸いである。

審査長 株田 昌彦